

放送ストリーミング情報収載

放送ストリーミング情報【2015No.41】(HP 収載)

分類： ネットストリーミング

局等： ベルリンフィル Digital Concert Hall

作曲家： アンTON・ブルックナー

曲名： 交響曲第7番ホ長調

演奏： セルジウ・チェリビダッケ指揮ベルリンフィルハーモニー

関連サイト： <https://www.digitalconcerthall.com/ja/concert/11463>

概要：

1992年3月31日にチェリビダッケが1954年以来38年ぶりに Schauspielhaus Berlin でベルリンフィルを指揮した演奏です。



プログラム解説にはチェリビダッケとベルリンフィルの複雑な関係についてつぎのように述べられています。

「1992年3月31日と4月1日、セルジウ・チェリビダッケは1954年以来38年ぶりにベルリンフィルを指揮しました。これは、当時のドイツ大統領が主催したチャリティ演奏会の枠で、いわば特別待遇。チェリビダッケは、カラヤンがベルリンフィルの首席指揮者に選ばれて以来、オーケストラに背を向けてきましたが、大統領の仲介により、「和解」の機会が組まれたわけです。しかし実際には、チェリビダッケはこのコンサートでベルリンフィルと確執を起し、結果的に再共演はありませんでした。今回アップされるのは、この伝説的演奏会の映像と、リハーサルの模様を収めたドキュメンタリーです。演奏は、正味86分を越える長大なもので、チェリビダッケの「第7」としても、特に雄大なものに数えられます。しかしそれ以上に興味深いのは、リハーサル（ドキュメンタリー）でしょう。ここでは、なぜこの機会が必ずしも「和解」に至らなかったかが、明らかにされています。チェリビダッケはベルリンフィルに対し、「ブルックナーが分かっている」と同断。つまり、「カラヤンのもとでブルックナーを演奏してき

たベルリンフィルは、ダメだ」という高圧的な姿勢で、リハーサルに臨んだのです。この挙動に、ベルリンフィル団員は態度を硬化。険悪な空気が広がるなか、リハが進んでゆきます。その合間には、戦後直後のチェリビダッケを知り、彼に心服する古参団員たちの弁護が挟まれ、実にスリリングな内容となっています。一方、彼の厳しい指示は、思わず膝を打ってしまう含蓄に富んだもの。チェリの指揮芸術のあり方が、深く実感されます。全体として、カラヤンへのルサンチマンを抱えるチェリが、ベルリンフィルを相手に「計算を誤った」ことを生々しく伝える、歴史的映像です（ドキュメンタリーは日本語字幕付き）。」

また、下記サイトには「帰還が実現した 1992 年の演奏会の機会に収録されたリハーサルのドキュメンタリーがあってチェリビダッケとオーケストラの間で、微妙なやり取りが行われるスリリングな内容が見て取れる」と解説にあります。しかし、リハーサルの様子を見てみると、厳しい言葉が飛ぶ反面、笑い声もする和やかな場面もあります。

<https://www.digitalconcerthall.com/ja/film/233>



さて本番の演奏はと言えば、チェリビダッケはブルックナーの7番をゆっくりめのテンポで淡々と進めていきます。しかし、その音楽性は緊張感あふれる中にも聴衆の心を捉えて行くようです。それは演奏を終えた時のチェリビダッケの表情や聴衆の反応にも表れています。そこではオーケストラとともに達成感を感じている一人の音楽家があるだけで、上記の解説にあるような確執は感じられません。こういった歴史的な演奏が、最新のデジタル技術によって蘇ることはありがたいことです。